

10月の季語 木の実落つ(このみおつ)

手招きて木の実拾はせ母たのし 今井つる女



季節の感じ方は人によって違うが、もちろん住んでいる場所によっても違う。東南アジアに転勤していた友人からの年賀状には、「2度目の常夏のお正月ですが、年がら年中暑いなかで生活していると、一体何回めの正月を迎えたのか、実感がわかりません」とあった。

私もいつか、常夏の島に住みたいと思ってきたが、秋が深まっていくのを感じる日には、トコナツ生活はキツイだろうと想像がつく。

子どもの頃、家の東隣にはドイツから帰国した大家族が住んでいた。庭の境界線は丸っこい石を3段くらい重ねただけの石垣になっていたが、それもあやふやに壊れかけているあたり、どちら側の木ともいえないような境目に、数本の椎の木があった。秋にはよく実のなる椎の木だった。

小指の先のようにほっそりした椎の実、栗よりずっと色が濃くてツヤツヤしている。炒って、なかの白い実を取り出して食べるとおいしくて、毎年「食べ過ぎてはいけない」と言われていたのを思い出す。また、「どんぐりは食べてはいけない」とも言われたが、ある年、どんぐりも食べてみよう、とフライパンで椎の実と一緒に炒って食べたことがある。太ったどんぐりは皮が焦げるわりには中まで火が通りにくく、食べてみるとエグ味が強くて、ちっともおいしくなかった。



焼栗 オランダ デルフトの歩道で

子ども同士では「どんぐりを食べるのもりになる」という話が回っていたが、し、し、渋い味なのが、いかにもと、面白かった。

焼栗はあっちこっちで食べる機会があったが、炭の上に金網を置いてポツリポツリ焼いていたオランダの焼栗と路上の寒さも記憶に残っている。

ハロウィン

日本人の季節感とは馴染みのなかったハロウィンだが、近年、子どもを持つお母さんたちに急激に浸透してきている。

ハロウィンについて知識を持っている人なんか少なそうと思うが、そこはそれ、「イベント大好き層」が着実に増えているから、理屈はあんまり関係ないみたい。

でもでも、ハロウィンってなに? もともとはケルト人の宗教行事(死者の魂や精霊や魔女がこの世にやってくるお盆のような日)だったのが、万聖節(諸聖人の祝日 11/1)の前夜祭、万霊節(死者の日 11/2)とも絡んで、10/31夜のハロウィンになっていった。

なぜ、かぼちゃのランタンをつくるの? 「ジャックオーランタン」というアイルランドの伝説にもとづく。

飲んだくれのジャックは悪魔をだまして、生きながらえだが、やがて死んでからは、天国にも地獄にも行かれず、石炭の明かりをともしたカブを持たされて、この世とあの世を行ったり来たりすることになったというストーリー。

カブ かぼちゃへと変化したのは、アイルランドからアメリカへ移動してきた人たちが、大きくカラフルなかぼちゃを使うようになったため。

ハロウィンの仮装はなんのため?

とりつこうとする悪霊が仮装を見て退散するように。

なぜ子どもにお菓子を配るのか?

“Trick or Treat!”の行事は新しい風習で、30~40年前からアメリカで広まっている。

日本人のハロウィンのイメージは?

1982年公開のステイブン・スピルバーグ監督の『E.T.』が原点かと思う。映画の中で、エリオットたちはハロウィンの扮装にまぎれて、E.T.を宇宙へ返そうとするが、外へ連れ出したところ、ヨーダ仙人のコスチュームの人を見つけたE.T.がそっちについていこうとしたりするシーンもあった。

2005年のティム・バートン監督、ジョニー・デップがウィリー・ウォンカに扮した『チャーリーとチョコレート工場』にはウォンカの子どもの頃の回想に、父親(歯医者)がハロウィンキャンディを暖炉に投げ込むシーンがある。



日本で最初のハロウィン仮装パレードは原宿キデイランド主催で1983年のことだから、『E.T.』の翌年にはじまったことになる。

それから忘れてならないのが、ディズニー・ハロウィーン、ユニバーサル・ワンダー・ハロウィーン。さらに、イクスピアリ・ハロウィーン、ナンジャ 仮装&コスプレコンテストなど。日本人のハロウィンのイメージは、ずばり、**仮装とキャンディとかぼちゃ**。デコレーションするのは楽しい、しかし、このハロウィン、ちょっと「食べ物不足」・かぼちゃパイとスープじゃホームパーティもねえ、と主婦から不満があがっている。クリスマス=チキン、赤緑サラダ、ピザ..のような定番メニューが生まれるのはいつ?